

Hard Times の 〈読み〉 の差異

溝 口 薫

Summary

Hard Times as a Novel about How To Read : An Aspect of Dickens's Romantic Imagination Seen in Sissy's Way of Reading

Kaoru Mizoguchi

Hard Times is a critique of the utilitarianistic ethos of mid-Victorian industrial society. To put it another way, the novel is a critical analysis and examination of the scientific, rational, economic "hard" way of reading peculiar to the era. The chief methods Dickens takes for the polemical novel with such a purpose are

- 1) retribution plot on Mr. Gradgrind and other Coketowners whose scheme of life brings miseries to the surrounding people,
- 2) satire on these characters' readings, provided not only by the sharp tongued narrator of the novel, but by the characters themselves through their own ridiculous speeches and arguments about how to read,
- 3) the contrast between the readings that callous and calculating Coketowners prove and that disinterested and humane Sleary's circus people and Sissy Jupe show.

Among the last group of characters, Sissy Jupe will be focused in this paper : for it is only through her reading that Louisa the heroine is led to salvation from despairing emotional crisis and fragmentation caused by her father and other materialistic exploiters.

Through the analysis of Sissy's reading, especially of its methodical nature and function, I will attempt to define the significance of Sissy Jupe in relation to Dickens's Romantic antithesis against the underlying principle of the industrial society.

I

1854年に週刊雑誌 *Household Words* に20週にわたって連載された Charles Dickens (1812-70) の中編小説 *Hard Times, for These Times* は、Victoria 朝中期産業社会に対する手厳しいクリティークとして有名な作品である。しかし架空の北部工業都市 Coketown を舞台とするこの小説は、必ずしも当時の多くの industrial novels¹⁾ と同様、時代の最大の問題であった労働者に対する社会的不公平を中心的に論じる社会小説として読まなければならないという訳ではない。実際テキストにあたってみると、労働条件の過酷さや、労働者の生活の悲惨さ等、労働者をめぐる問題が扱われているのは全体としての小説の半分を割る、というより、こうした問題は、むしろもっと根本的な問題の、社会の表面に集約的に現われた現象の一つとして扱われていることに過ぎないと気づくのである。

Hard Times における中心の問題は、端的に言えば、産業社会に特有の物の観方・考え方にある。産業革命以降、著しい産業技術の発展を見たイギリス社会は中産階級の強烈な上昇指向のエネルギーに導かれ、物質主義、自由競争を原理として新しい活発な生産的社会システムを作り上げたが、その一方で、自己の利益追求を優先させ、他人をその為の道具とみなす、計算づくで機械的なものの観方を急速に社会に浸透させることとなった。個人の心をそうしたものにへと変貌させ、疎外に追い込まずにはおかないこの新文明の危険な副作用について、Dickens は既に、*Dombey and Son* (1846-8) の主人公 Mr. Dombey を中心として描き出している。しかし *Hard Times* では、Dickens はこの問題をもっと集中的かつ発展的に取り上げて、言うなれば強欲で非情なこの思考法が、社会的に正当化され定着化する、その原因と構造を、Coketown という社会モデルにおいて検討しようとしているのである。そして、*Hard Times* で Dickens が、この社会的変化の指標として、またさらにはその大きな要因として特にマークしているのが、合理的科学的経済思想——utilitarianism であった。

このような意味で、*Hard Times* は、功利主義的な読みの方法を、ひいては、産業時代の特有な読み方としての広い意味での功利的な読みの方法を解体することを目指す小説と考えることは可能であろう。では、そのような観点からの産業社会に対するクリティークとして、Dickens はいかなる方法によって議論を進めるのであろうか。

まず第一に考えられるのは、この小説の主人公にして、功利主義思想の代表者と考えられる Mr. Gradgrind の、子供達を通じて示される、野望挫折のプロットであろう。彼は、引退した金物商人で、その後は小学校の校長として、当時としては最新のこの哲学思想の普及に従事しつつ、国会議員になるべき潮時をねらっているという人物であるが、子供達に己れの理想通りの教育を施して、結局皆不幸にしてしまうのである。

さてこのような方法をいわば通時的方法とするなら、共時的ともいえる方法もある。すなわち、Gradgrind を始め、彼らの仲間の紳士達や、その影響下にある人々の speeches と、それら

に向けられる narrator の風刺である。*Hard Times* における人物の殆んどが、相当多弁である反面行動が少ないことは、この作品の特徴的な事実であるが、この作品における発言は実際単なる drama 性の導入や個性表現という以上に、テーマに関して重要な役割を担っている。というのは、発言は、この作品においては、テーマを具体化し複雑な plot を起こす行為の替りに個人や集団の読みの方法を提示する vehicle となっているからである。そして *Hard Times* におけるこの多弁な人々は、Gradgrind を中心に一つの network を作っている。彼の「親友」の叩き上げの資本家で (58; bk. 1, ch. 4)²⁾、粗野な卑下慢の Bounderby を始めとして、London からきた貴族紳士で、ニヒルな女誑しの Harthouse、また権力志向だが無責任なデマゴーク Slackbridge、さらに Gradgrind の息子 Tom や教え子の Bitzer といった嘘つき達、あるいは、何か事あれば即病気に逃げ込む Mrs. Gradgrind に至るまで、それらの発言は、みなそれぞれにその私欲の内容や程度、そして合理性の程度において、Gradgrind とは少しずつ違うが、一様に自己中心的で功利的な読み方を示す彼の variation として提示されているのである。このネットワークは、二重に働く。即ち功利主義的な読みの方法の神話が Coketown に存在することを暗示するとともに、その差異を通して逆にその神話の解体を図るものとなっているからである。一方 narrator はこれらの読みの一つ一つに容赦のない攻撃を仕掛けることで、批判を明示化しているといえるだろう³⁾。

ところで Dickens の批判的議論の方法は、以上のものに限らない。Gradgrind らの読みとは全く違った読み方を示す、Sleary の率いる circus 一座の人々の読み、またとりわけ、その一団付の道化 Jupe の娘の Sissy が、読む方法の対照という手段を通してこれに大きな貢献をしている。ただ Sissy の読みは、Gradgrind をはじめ Bounderby あるいは Harthouse が次第に破滅に導いていったヒロイン Louisa を最終的に救済する唯一の鍵であるにもかかわらず、Sleary 一座の関連で論じられることこそ多いが、単独に研究されることは意外に少ないのである。それは Sissy が、上述の多弁な人々に対して、Sleary 程にも反論することを禁じられていることとも関わりがあるようだ。しかし寡黙だからといって Sissy は、その読みの方法まで制限されている訳ではない。Sissy の読みはその僅かな発言とともに、その表情や動作・態度の描写を通して示されて来るのである。拙論では以上のような点に留意しつつ、Gradgrind や Bounderby, Louisa や Harthouse のそれと対照される Sissy の読みの方法について分析し、その機能・特質を定義することを試みてみたい。というのは、それはとりもなおさず、小説家としての Dickens が、産業社会の潜在的原理に対してどのような antithesis を提出しているのかを見極めることに繋がってゆくからである。

II

まず冒頭及び続く第二章から示されてくる Gradgrind の読みと Sissy の読みの対照から Sissy の方法的特徴を考えてみたい。この章は Gradgrind の学校が舞台となっており、彼はまさしく読み方を教えてはいるのだが、そこは学校というよりは彼のハードな世界観を、子供達のソフトな精神に、矢継早に刻印してゆく factory といった方が適しい所となっている。とも

あれ彼は新しく入学してきた Sissy にも、Coketown にあるべき読み方を押しつけて彼女をすっかり驚吃せしめるのであるが、中でも示唆に富む箇所は、彼女に「馬」の定義を求めるくだりであろう。Sissy は曲馬を中心とするサーカス一座の子供であって、馬とは昼夜を共に、家族同然に暮しているのである。「馬」といわれておそらく彼女の心にはあまりにも多く想いがよぎったのであろう、彼女は返答に窮してしまう。（“Sissy Jupe [was] thrown into the greatest alarm by this demand.” (49; bk. 1, ch. 2)）そこで、優等生 Bitzer の登場ということになる。

‘Bitzer,’ said Thomas Gradgrind. ‘Your definition of a horse.’

‘Quadruped. Graminivorous. Forty teeth, namely twenty-four grinders, four eye-teeth, and twelve incisive. Sheds coat in the spring; in marshy countries, sheds hoofs, too. Hoofs hard, but requiring to be shod with iron. Age known by marks in mouth.’ Thus (and much more) Bitzer.

‘Now girl number twenty,’ said Mr Gradgrind. ‘You know what a horse is.’ (50; bk. 1, ch. 2)

この舌を噛みそうな Bitzer の「模範解答」の中に我々は Gradgrind 流の読みとは、馬の体を各部位に分節・分析して、その形態的集合体としての観念の馬を馬とする読み、分節的・観念的読みであることを理解することができる。これに対して、Sissy の読みはどうだろうか。まずは感情的なニュアンスに富んだ馬、そしてサーカスの芸をする馬、即ち、可能性の馬を読み取る読みであって、それは非分節的、具体的そして想像的読みということができるであろう。

次の引用ではさらに Sissy の読みがもっと明示的に対照させられている。場面は、Sissy が統計のクラスで先生の M' Choakumchild に「10万人の航海者のうち、500人が死んだとすれば死亡率はいくらか」と問われて“nothing”（「ゼロです」）と答える大失敗をしたことを Louisa に報告しているところである。

‘Yes, Miss Louisa—they [statistics] always remind me o stut-terings, and that’s another of my mistakes—of accidents upon the sea. And I find (Mr M’Choakumchild said) that in a given time a hundred thousand persons went to sea on long voyages, and only five hundred of them were drowned or burnt to death. What is the percentage? And I said, Miss,’ here Sissy fairly sobbed as confessing with extreme contrition to her greatest error; ‘I said it was nothing.’

‘Nothing, Sissy?’

‘Nothing, Miss—to the relations and friends of the people who were killed. I shall never learn,’ said Sissy. (97–8; bk. 1, ch. 9)

確かに“statistics”を“stutterings”（吃り）と覚え間違えたり、Gradgrindの学校におけるSissyの成績ははなはだ振わない様子である。しかしむしろここで照らし出されてくるのは、

計算上 0.5% という微少な価値を割り出してくる科学的認識方法、そして 500 人位の人間なら死んでも微量であるということを生自然的帰結とする合理的読みの非情さなのである。こうした Gradgrind の読みが、いわば事実を数字に還元し、数式という logos によって整理する読みであるとすれば、「死亡した 500 人の友人や身内にしてみれば——パーセンテージなんて 0 だ（無意味）」とする Sissy の読みは、残された人々の心中に思いを寄せる、想像的共感的読みである。また認識する為に事実を数字に還元するプロセスを加えたりせず、事態とそれに伴う感情を総体として認識する、具体的直接的・総合的読みでもある。

しかし総合的共感的とはいっても、Sissy の読みは主観的読みに伴いがちな大雑把さや、恣意性はない。複雑な事態や感情であってもそれを細やかにすべて包むように感受共感する、直観的総合性なのである。次の引用は、Gradgrind の娘 Louisa が、粗野で自己中心的な Bounderby の求婚を、感情的体験の未熟さゆえに、半ば自暴自棄的に、そして半ばは、弟が賭け事に走ってためてしまった借金を返す手立てとして、承諾したその直後の場面であるが、それを聞いた時の Sissy の反応は、そうした彼女の読みの性質をよく示すであろう。

When Mr Gradgrind had presented Mrs Bounderby, Sissy had suddenly turned her head, and looked, in wonder, in pity, in sorrow, in doubt, in a multitude of emotions, towards Louisa. Louisa had known it, and seen it, without looking at her. From that moment she was impassive, proud, and cold—held Sissy at a distance—changed to her altogether. (138; bk. 1, ch. 15)

ところで、ここでこのことについて少し触れておきたいのは、Sissy と dramatic に対比されている Louisa の反応である。Louisa は父親の学校の模範生である一方、父親の読み方を押しつけられた結果もたらされた精神の不毛、感情の枯渇に悩む人物である。Sissy に引かれておりながらこのような形で拒絶を示す、引用の最後の一行は、そうした Louisa の複雑な内面、そして彼女の抱える問題の深さを暗示するものとしてみのがせない。おそらく Louisa がこうした反応に出た理由とは、Louisa が、自分のすべてを見て取るような Sissy の視線の中に、なにより打算と自己欺瞞という自分の罪を見せつけられる思いがしたからではないか。とすればここに示されてくるのは、Louisa 自身半ば意識して悩んでいたはずの問題（すなわち感情の交流の不能、そして自分自身の全体性からの分節化されている断片的状態）を、実は Louisa 自身が求めてもいるという事態に他ならない。Louisa がこの後 Sissy をこのような次第で拒絶したことをきっかけとして、さらに深い混乱と感情的飢餓に陥ってゆくことは、必然的である。そして彼女が、そこから救済されるためには Sissy の Louisa についての読みを、全面的に受け入れねばならないのである。これを導いた救済の鍵としての Sissy の読みの機能について述べることは後に譲るとして、本題に立ち戻ってさらに Sissy の読みの方法の記述を進めよう。

さて Sissy の総合的・共感的よみはまた、Gradgrind 流の読みとは対比的に非目的性と定義することが可能であろう。たとえば Gradgrind の読みは、もともとモノ、ヒト、コトにかかわらず、その存在としての全体性から、抽象的な観念へと分断し、一つの判断を下すものである

が、それはとりもなおさず、混沌とした対象に一応一律に説明のつく整理をあたえ、対象を使
っての活動に能率をあげようとする合理的目的のために存在する読みなのである。つまり
Gradgrind の読みとは自らの合理的体系に適合するための読みともいえる訳だが、自分の合理的
の体系を最善と盲信し、修正を加えない Gradgrind の場合にはさらに一步進んで自分の体系
に合うものだけを読む、目的に縛られた極めて窮屈な限定的目的読みとなっているといえよ
う。一方 Sissy の読みは広い意味でも狭い意味でも合理的目的性からは一切自由なのである。

そして目的読みということであれば、忘れてはならないのは、Gradgrind の読みの grotesque な乱用者、Bounderby であろう。Bounderby は、Book 1, Chapter 5 “Keynote” において様々な統計的記述を証拠として持ち出せば、労働者は呑兵衛で自堕落、しかも強欲で
恩知らずの、要は “a bad lot” だと決めつける紳士達のいわば主導者である (67)。引用は金持
ちしか離婚できない仕組みになっている法の不公平に、思わず “‘Tis a muddle” と疑問の声を
上げた素朴な労働者 Stephen Blackpool に対して、Bounderby が、支配階級並に物を欲しが
る強欲・忘恩の悪徳の臭いを嗅ぎつけて、彼を断罪する部分である。

‘Now, you have always been a steady Hand hitherto; but my opinion is, and so I tell you plainly, that you are turning into the wrong road. You have been listening to some mischievous stranger or other – they’re always about – and the best thing you can do is, to come out of that. Now you know;’ here his countenance expressed marvellous acuteness; ‘I can see as far into a grindstone as another man; farther than a good many, perhaps, because I had my nose well kept to it when I was young. I see traces of the turtle soup, and venison, and gold spoon in this. Yes, I do!’ cried Mr Bounderby, shaking his head with obstinate cunning. ‘By the Lord Harry, I do!’ (114; bk. 1, ch. 11)

ここで明らかになってくるのは、Bounderby の読みが、Gradgrind より以上に強引な目的の
ための読みとなっている事である。彼の方法をみてみよう。まず彼は Stephen がこうした疑問
を發した背景事情の一切を切り捨て、ただ体制に疑問をさしはさんだという行為のみを取り上
げ、これを悪とむすびつけ短絡的に道徳的裁断を下しているが、それは読む対象をすでにその
読む目的の形に分節化してしまうものに他ならない。さらに彼は Stephen 断罪の根拠として、
労働者に関する己が長い経験を持ち出して来るのだが、(彼が嘘つきであるという事実を知ら
なかったとしても) それは、実際論理的には何の説得性ももたないものであることは明らかで
ある。というのは他でもない、彼がここで展開している論理は、This is bad, because I know
it is bad. とでも要約してよい tautological なものだからだ。ただ Bounderby はそれを、権力
者の意志で無理やり納得させてしまう。つまり Bounderby の読みは、労働者達に対する不当
な搾取と不公平の責任回避と、彼らの不満を押さえ込むという資本家側の一方的目的によっ
て作りあげられた、無理という力の論理に他ならないのである。

ところでこの Bounderby の断罪のための断罪の読み、合理的な体裁をした非合理的な目的

的読み、自己中心的な目的のための、恣意的に分節化されるがゆえに Gradgrind よりは一層冷酷な読みに対して、Sissy は、いかなる自己中心的目的にも支配されず、従って早急な道徳的判断も無縁である読みを呈する。二人の読みは、例えば Sissy を置き去りにした父親をめぐるみごとな対照をなす。父親の出奔が発覚し、狼狽する Sissy や、悲劇の真相に迫ろうとする人々をさえ切って、Bounderby は次の様に言い放つ。

'Now, good people all,' said he, 'this is wanton waste of time. Let the girl understand the fact. Let her take it from me, if you like, who have been run away from, myself. Here, what's your name! Your father has absconded—deserted you—and you mustn't expect to see him again as long as you live.'

'He is a runaway rogue and a vagabond, that's what he is, in English.' (79, 75; bk. 1, ch. 6)

しかし Sissy は、こうした冷酷な「事実」をつきつけ、父親を「悪者」と決めつける Bounderby の言葉を、一切うけつけない。恨みの言葉一つ発せず、以下の引用にあるように「むしろ自分のためにしたことだ」として、あくまで父を責めないのである。それは単に非目的的であるという以上に、いかなる自分の都合、欲望も考慮にいれない自己否定的とさえいいうる読みということができるものである。

'O my dear father, my good kind father, where are you gone? You are gone to try to do me some good, I know! You are gone away for my sake, I am sure. And how miserable and helpless you will be without me, poor, poor father, until you come back!' (78–9; bk. 1, ch. 6)

ところで Gradgrind や Bounderby のように読む対象を合理的目的的に読む読みとは、その強引さを差し引いたとしても極めて強力なものであるということは、その読みの特徴としてどうしても認めなければならないだろう。何故ならそれは、読む対象を、本質的には取りとめもない総体から、実際の利益が獲得できる関係においてそれを限定的に明瞭に把握する方法だからである。断罪するにしろ、あるいは数量へ置換するにしろ、分節化して全体像がわからなくなっても、こうした関係の把握は、現実を能率的で効果的に、即ち強力に動かす力となり得る。だから読みの効力という観点からみた場合、Gradgrind の読みや Bounderby の読みは確かに practical なのであり、一方、Sissy の読みは impractical といわざるを得ないであろう。だが、このように述べたからといって、Sissy の読みは、現実を動かさないのではない。また無用なのでもない。それは彼らの読みが働き得ない領域で働き、別な有用さ、効力を発揮してくるのである。次章では、この点を、Louisa をめぐる Sissy と、Harthouse の読みの対照の内に見い出してゆく。

III

Harthouse の読みは、ある意味で Gradgrind や Bounderby の読みのあまりにも強引で荒っぽい性質を、退屈と気粉れ、そして持ち前の能力によって洗練したとでもいうのか、極めて柔軟なものに改めた読みといえるのである。というのは彼はまずは、Gradgrind や Bounderby のように体系的原則や自己保全といった自己の目的のために読む対象を直接限定してしまうということがない。むしろ、対象について、「非目的」に向い、かつはその背後にある事情や可能性をも含めて把握することを目指して、注意深く観察し、実証的に読んでゆくからである。例えば以下の引用は、Harthouse が興味を引かれた Louisa の様子を観察している箇所であるがここで Harthouse が一見何気ない視線を装いながらも、Louisa の内心に迫るため心底ではどんな小さな事も見逃すまいと目を凝らし、貧欲な観察を続けていることが、鮮明に伝わってくる。

'Is there nothing,' he thought, glancing at her as she sat at the head of the table, where her youthful figure, small and slight, but very graceful, looked as pretty as it looked mispalced; 'is there nothing that will move that face?'

Yes! By Jupiter, there was something, and here it was, in an unexpected shape! Tom appeared. She changed as the door opened, and broke into a beaming smile.

A beautiful smile. Mr James Harthouse might not have thought so much of it, but that he had wondered so long at her impassive face. She put out her hand—a pretty little soft hand; and her fingers closed upon her brother's, as if she would have carried them to her lips.

'Ay, ay?' thought the visiter. 'This whelp is the only creature she cares for. So, so!' (163-4; bk. 2, ch. 2)

さらに彼はこうした注意深い観察ばかりではなく、例えば Tom に酒を振舞い、籠絡して、その彼の口から Louisa に関する情報を引き出して観察結果の裏書きをするという、慎重さをみせていることも忘れてはならない (165-9; bk. 2, ch. 3)。Harthouse という人物は、事を起す動機は気粉れ ("purposeless" (207; bk. 2, ch. 8)) なのだが一旦読み取るとなると、その方法は、むしろ周到確実この上ないのである。

さて Harthouse は、以上述べたような読み方で、Sissy と同じ位総合的で、かつ深い読みを達成することとなる。すなわち、Coketown の中で Sissy をおいて誰も他に読み取り得なかった、Louisa の「氷」のような外面の下の本当の姿を——即ち、共感や愛情を求める情熱的な側面を、それを抑圧的に取り巻くすべての事情とともに、理解してしまうのである。いやそればかりではない。Harthouse は、同上の引用箇所にも暗示されているように Louisa の弟に向け

る愛情の中に、いささかの倒錯が生じてきていること、つまり兄弟としての慈しみ以上のものとなりかかった情熱が混じっていることをも理解するのである。弟のみが、唯一人心を開ける朋輩である極めて不自然な抑圧的生育環境において、Louisaの弟に抱く愛情にやがて近親相姦的なものが混じってくることは、ある意味で当然のことかもしれない。以下の引用はその傍証であるが、賭け事による借金苦からついに窃盗を働いたのではないかと疑い、夜おそくTomの部屋を訪ねたLouisaのこの言葉は、Louisaの追いつめられていた深刻な状況を暗示するであろう。⁴⁾

'As you lie here alone, my dear, in the melancholy night, when even I, if I am living then, shall have left you. As I am here beside you, barefoot, unclothed, indistinguishable in darkness, so must I lie through all the night of my decay, until I am dust. In the name of that time, Tom, tell me the truth now!' (216; bk. 2, ch. 8)

このようにみればHarthouseの読みはSissy的な読みの繊細さや深さにおいて対等もしくはむしろ優っているのではないかとさえ疑いたくなるのであるが、しかしHarthouseのsubtleな読みは豊かな総合性、深さという点で細やかなSissy読みとは決定的に劣るものだ。それは彼の読みが究極的には、功利的目的であるということによる。HarthouseはLouisaを読むのに、その多面な全体を読みながら、結局それらとその利用価値に応じて考えているのである。例えばHarthouseは彼女の弟に対する混乱した愛情のうち、兄弟への慈しみは、単にそれを利用して、Louisaに接近する手段と考えこそすれ、それ以外のものではなく、一方彼女の倒錯に窺える官能性の方は、彼女の美しい肉体とともに（例えば、一つ前の引用箇所でも明らかのように、彼の視線は彼女の肉体をなぞる、いかにもsensualなものとなっている）彼のsensualな快楽に利用できるものとして魅せられているのである。

このようにしてHarthouseはTomに対する共感を装って、次第次第にLouisaに接近し、ついには、Louisaの情熱を、巧みに官能的恋愛感情へと変貌させてゆくこととなる。それは逆にいえば、愛情豊かな人間に成長してゆく可能性のあったLouisaがHarthouseの遊びの道具として読み換えられてゆく過程ともいえる。LouisaはHarthouseとの恋愛が、Gradgrindに統計の単位として育てられてきた自分の過去、またBounderbyの保身の道具として嫁に迎えられた自分の過去と変わりのないものであることに気づいていないわけではないようだ。しかし、本当の共感の体験のないLouisaには、彼との官能的恋愛感情に、空しさを感じても、それを拒絶するといった目覚めた反応をすることはできないのである。Louisaが、Harthouseといよいよ駆け落ちをしようかという段になって、実家に舞い戻ることになるのは、彼女の感情的飢餓を充たす一時的手段として浅薄な恋愛感情に走るか、それとも終生感情的飢餓の内に留まるかというどちらにせよ絶望的な選択をせねばならない混乱のうちになされるが、それは、結局、不幸の源泉である家庭（父親）へいわば一種の復讐に向う旅であるとともに自己への回帰を果すものともなった。というのは、SissyがそうしたLouisaを、Harthouseらとは正反対に、むしろ本来Louisaが願う形で読み換えたからである。

以下の引用は帰宅後も Sissy に背をむけつづける Louisa の内心を描出した箇所であるが、この時の Louisa が、Sissy への共感はおろか Tom への慈しみの気持ちも、すっかり見失ってしまい、渦巻くのは自己嫌悪、憎悪、怒りといった悪感情ばかりで、自分自身さえ見えなくなっていることをよく示す。文中で “the involuntary look” とあるのは、先に引用した Sissy の、すべてを細やかにみとる邪気のない、直観的な視線を指し、Louisa はそれを思い出して、新たに憎しみをたぎらせているのである。

She [Louisa] did not raise her head. A dull anger that she should be seen in her distress, and that the involuntary look she had so resented should come to this fulfilment, smouldered within her like an unwholesome fire. (246-7; bk. 3, ch. 1)

しかし Sissy はこうした Louisa を拒否することも回避することもしない。その胸の中の、彼女に対する憎悪すら含めて彼女の一切を受け入れるのである。のみならず彼女の心の中に幾重にも渦をつくる悪感情や nihilism を越えて、Louisa の胸中深くにしまいこまれた、終始かわらざる願いにむかって文字通り「手」をさしのべるのである。

It was well that soft touch came upon her neck, and that she understood herself to be supposed to have fallen asleep. The sympathetic hand did not claim her resentment...

It lay there, warming into life a crowd of gentler thoughts; and she rested. As she softened with the quiet, and the consciousness of being so watched, some tears made their way into her eyes. (247; bk. 3, ch. 1)

Sissy のこの「手」は、Louisa の心の中の厚い闇をまたたくまに打ち破り、他者とつながりあいたいという秘めたる願いへの通路を開くこととなった。それは、彼女自身にとって許し難く受け入れ難かった自分の総てを彼女の内なる可能性としての Louisa ともに受容するものだったからである。優劣を問題にしたり、罪を咎めたりせず、また一切の自己中心性からも解放された Sissy の読みによって、Louisa はまさにその願いを実現し、同時に自らを発見をすることとなる。次の引用は、以上の状況の melodramatic な敷衍である。

‘First, Sissy, do you know what I am? I am so proud and so hardened, so confused and troubled, so resentful and unjust to every one and to myself, that everything is stormy, dark, and wicked to me. Does not that repel you?’

‘No!’

‘I am so unhappy, and all that should have made me otherwise is so laid waste, that if I had been bereft of sense to this hour, and instead of being as learned as you think me had to begin to acquire the simplest truths, I could not want a guide to peace, contentment,

honour, all the good of which I am quite devoid, more abjectly than I do. Does not that repel you?

'No!'

In the innocence of her brave affection, and the brimming up of her old devoted spirit, the once deserted girl shone like a beautiful light upon the darkness of the other.

Louisa raised the hand that it might clasp her neck, and join its fellow there. She fell upon her knees, and clinging to this stroller's child looked up at her almost with veneration. (248; bk. 3, ch. 1)

感情が高揚した時の Dickens の筆致は思わず melodramatic なるようだ。しかしここに交わされる対話の感傷性に目を奪われず、示されてくる Sissy の読みとその効果を汲みとるならば、Sissy の読みとは、相手を自分の目的のための道具とみなし人としての全体性から分断し、人間関係を破壊する destructive な読みである Harthouse や Gradgrind の読みと反して、一切を深く受容することによって相手の精神の中の不在に形を与え、また精神的つながりをも実現する、精神的に creative な読みといえることが明白であろう。

IV

今みたような機能があるからこそ、まずは Sissy、そしてその読む方法は、煤煙におおわれ、見透しのかかなくなった Coketown に息を吹き込み、視界と命を取り戻す光⁵⁾とも望みともなるわけであるが、本題に立ち戻って、Gradgrind や Harthouse との対比を通してなおその方法的性質を定義することを試みるならば、今一つ言えることは、Sissy の読みは、いわゆる visibility に支配されないということであろう。例えば、Sissy が Louisa を読む際に、彼女を拒否する冷たい態度に、全く左右されなかったことを思い出してみたい。Louisa 自身内心に Sissy と和解したいという気持ちをまったく意識していなかったにもかかわらず、Sissy はそうした壁を異次元の軽さをもって楽々と乗り越え、可能性としての Louisa の願いを読み取ったのである。また Sissy の読みとは、目に見えるものに支配されないというばかりではない。先にみたように、Sissy の読みは見えたものを証拠として、それを合理によって何らかの結論に結びつけたりはしない読みであった。それは非目的的阅读、合理 free の、従って、逆にいえば、完結性に支配されない読みともいえるのである。だから、可能性を汲み取る Sissy の読みは Gradgrind らの思いも及ばない所まで行き届くこととなる。

そこで我々が考えたいのは、Tom に対する Sissy の読みである。積もる賭け事の借金を Louisa に支払わせて感謝をしない Tom、そして Louisa の限界以上になると、勤め先の銀行から横領する Tom、あまつさえ自分の罪を純朴な Stephen になすりつける “whelp” Tom に対して、Sissy は何も責めず、Gradgrind 父娘の願いを汲み入れて、circus 仲間の手を借りて、遠方への逃亡を便宜し、成功させるのである。この plot に関しては、多くの批評家が、この小説の難点としている。というのは、Louisa を Sissy が助けるのは、それなりの愛情がある人物

ゆえに妥当だとしても、感謝の念のないつまらない打算家の犯罪者 Tom を助けるのはどうか？ 実際罪を犯した者を法的裁きの手に委ねず、逃がすというのは全く法的秩序をないがしろにする行為ではないか？ よしんば circus の団長、Sleary 自身が言っているように、父親に捨てられた Sissy を、引きとってくれた Gradgrind への恩返しとしてこの行為を捉えたとしても (298-9, bk. 3, ch. 7), それではあまりにも子供の話しみた unrealistic な展開であって、この小説の深刻な人間危機の問題にとても対処できるような、解決方法とはなりえないというのである⁶⁾。

しかしこの箇所は次のように考えることができるのではないか。確かに物語を通して、Tom が感謝や愛情をみせることはないことは事実としても、少なくとも彼は「不正直の正直」を気取る Harthouse (162; bk. 2, ch. 2) や、冷酷・無情を当然のこととする鈍感で嘘つきの Bounderby といった真の偽善者と比べてみれば、心底悪い人間とは言えない、と。Tom は悪人というよりはむしろ、心情的、共感的な体験に欠け、忍耐に欠ける、精神的に未熟で虚弱な人間なのである。とすれば、Sissy はそうした弱さの彼方に、弱さゆえに起こり得る dynamic な心の可能性を見たのではないか。即ち、罪を犯し、家族の信頼や、愛を Tom が手ひどく裏切ったとしても、なお彼らは Tom を見捨てていないことを、つまり罪は罪のまま、そして弱さは弱さのまま、Tom の全体を受け入れていることを、いつか感謝をもって思い出し、自分の心の支えともする可能性があることをである。

確かに text を通じて、Tom にそのような事が起こりうる兆しを我々は見つけることができないのは、重ねて述べるが、事実である。しかし最終章に示される、可能性を読むことを覚えはじめた Louisa の未来への vision の中に Tom の悔悟が暗示されている事は、目にみえる形で示されていないからといって、完全に否定されるべきではない希望を Tom に託した Sissy の読みの意義を保証するものと考えられる。

A lonely brother, many thousands of miles away, writing, on paper blotted with tears, that her words had too soon come true, and that all the treasures in the world would be cheaply bartered for a sight of her dear face? At length this brother coming nearer home, with hope of seeing her, and being delayed by illness; and then a letter in a strange hand, saying 'he died in hospital, of fever, such a day, and died in penitence and love of you: his last word being your name?' Did Louisa see these things? Such things were to be. (313; bk. 3, ch. 9)

このように見てくると、Sissy が敢えて法を犯してまで Tom を救うという situation が設定されているのは、そうした Sissy の読みに関して Dickens が、むしろメッセージを用意しているからであると考えたくなってくる。実際そのこととつきあわせて考えたいことは、Sissy は、誰でもを「許し」たのではなかったという事実である。断罪という程ではないけれども、Sissy は Louisa の弱味につけ込んだ Harthouse に対しては断固町から去ることを要求してい

るのである。(249-57; bk. 3, ch. 2) とすれば、一見際限のないような Sissy の読みに一種の読みの基準があることがわかる。いや「基準」ということばは Sissy の読みに適しい言葉ではないだろう——それはむしろ「法」と呼ぶべきものだろうか。それは社会秩序維持のためにそれを犯した者を罪人とし公平一律な処罰を加える civil law とは全く異なって、むしろ一人一人の精神と命が活かされることを可能ならしめ、一方それが損われることを憎む spiritual morality としての「法」である。Sissy が Harthouse に退去を命じたのは、この異質な次元の立法者としてではなかったか。

Dickens が Sissy において展開している想像力的読みを、あの熱血の詩人が考えた想像力的読みと早急に一致させて考えることはできないのは勿論である(例えば Dickens の場合、感情の要素が特に強調される)。しかし、想像力における、精神的・道徳的機能を以下のように説いた Shelley と、Dickens は、すくなくともこうした Sissy の読みを中心に見る限り、人間が命の可能性として持っている最高原理である「善」を照らし出し、実現するのは想像力であるとする点において、そしてその力によって計算と物欲にあけくれる産業社会に対抗しようとする点において、両者はまさしく共通の場に立っているといえるのである。

A man, to be greatly good, must imagine intensely and comprehensively; he must put himself in the place of another and of many other; the pains and pleasures of his species must become his own. The great instrument of moral good is imagination,...⁷⁾

注

1. Benjamin Disraeli, *Sybil* (1845), Mrs. Gaskell, *Mary Barton* (1848) 等。
2. Charles Dickens, *Hard Times* (Penguin Books). 以下テキストは Penguin 版により、引用、言及の箇所は、ページ数、編、章(58; bk. 1, ch. 4)の要領で本文中に示す。
3. こうした手法は argument novel の伝統につながる方法といえるものだろうがそれは、週刊連載というスペース上制限された出版形式で、いかに前作 *Bleak House* (1851-2, 月刊)と同じ規模をもつテーマを消化するかという難題に対して Dickens が考えた解決方法ではなかったかと思われる。Book 1, chapter 5 "Keynote" の紳士達の身勝手な Coketown 評や, Bounderby と労働者 Steven Blackpool の対話などを含め、発言や対話に依るこの方法は問題状況を詳細に抽出する realistic な方法が要求するようなスペース、そしてある意味での「退屈さ」を廃し、大胆自由に問題の核心に迫るものであり、いかにもディケンズらしい応用であるといえよう。
4. Paniel P. Deneau. "The Brother-Sister Relationship in *Hard Times*" *Dickensian*, 60 (1964), 173-77.
5. 同頁の引用に見られるように Sissy は発光する光として喩えられる。
6. David Lodge "The Rhetoric of *Hard Times*" *The Language and Fiction* (London, 1966), pp. 145-63.
7. Percy Bysshe Shelley. 'A Defence of Poetry' *The Selected Poetry and Prose of Percy Bysshe Shelley* (Modern Library, 1951)

[本論文は神戸女学院大学英文学科専門部会における口答発表に基く。]

(Received April 30, 1991)